

山崎貞著「新自修英文典」(復刻版) 研究社 2008年12月25日刊を読む

自修英文法典 (English Grammar Self-Taught) とは

1. 生れ落ちるから日夕親しんでいる自国語なら、別に文法などやらないでも相応に使いこなすこともできよう。しかし他国語を学ぶのに母国語に熟すると同じやり方で行けというのは、その国に生れ変れというに等しく不可能である。日本人が英語を学ぶのはたいてい13、4歳中学に入ってからで、それも一週わずか数時間に過ぎず、英人につく機会などは全然ない者が多い。そういう境遇の者にいわゆる自然法を強いるのは、その愚や誠に及ぶべからずである。
2. 他国語を学ぶには、どうしてもまず一通りその国語の性質を明らかにしてかからなくてはならぬ。国語の性質を教えるものは、すなわち文典である。なるほど文法に詳しいからとて、必ずしもりっぱな文章は書けまい。むずかしい本は読めまい、けれどもまた文法を知らずして文を作ろう、本を読もうというのは、舵なくして舟を進めようとするようなものである。
3. 要するに、われわれが英語を学ぶには、一方文法に通ずるとともに、一方なるべく多くの書を読み文を作り、ただちにその文法の知識を応用して行くのが最上の方法である。
4. 英語の文法書としてはりっぱなものがたくさんある。しかしそれは教師の指導を待って初めて実用の効を生ずるものである。また近ごろ独習用文法書も続々出版されているが、多くは理論に偏し、実例に乏しく、いちじるしく実習の方面が閑却されているの観がある。そこで編者は文法の知識をただちに英作文、英文解釈の実用方面に結びつけ、同時に学習者の理解記憶に便利な組織によって英文法を説いてみようと思い、本書の稿を起こしたのである。
5. 編者は正則英語学校に学び、同校に教え、同校の教授法を信ずるものであるから本書の組織、材料などの点において同校に負うところの多いことはいうまでもないが、また一方 Jespersen、Kruisinga、Mätzner、Onions、Sonnenschein、Sweet など諸家の文法書に負うところも少なくない。

大正 10 年晩秋

山崎貞

[コメント]

英語を教えることを職業とする先生も含め、一度英語を学んだ者が心静かに基礎から英語を学び直すのに最もふさわしいのが本書と考える。一語、一語が心にしみこむような英文法の基本書。自修、つまり Self-Taught 可能な名著。

- 2009年5月28日林明夫記 -